

かんちゃんなみちゃん
平井の今と昔を訪ねて

鈴木 克子

長い丹那トンネルを抜けると函南駅周辺は新緑に包まれていて、初夏の陽光がさんさんと降り注いでいた。

かんちゃんは妹の手をしっかりと握って

「さあ、二人で走って行こう!」

ホームの階段を駆け上がり駆け降りて行った。

改札口で身を乗り出しておじいちゃんは、いつもの優しい笑顔で出迎えてくれた。

「おじいちゃん! こんにちは、二人で来れたよ」

「こんにちはおじいちゃん! お兄ちゃんと一緒だったから大丈夫よ」

二人は息をはずませて言った。

「よく来た、よく来た、二人で来れるようになったんだねえ」

おじいちゃんは二人の成長を喜ぶかのように目を細めて言った。

二〇一七年五月連休初日、かんちゃんは六年生、なみちゃんは三年生だった。

車の中でかんちゃんは言った。

「電話でお話した通り今回はおじいちゃんの親友杉崎さんが住む、平井の歴史を詳しく知りたいんだ」
前におじいちゃんから親友杉崎さんから聞いたという平井の歴史に興味を持ったかんちゃんだった。
「杉崎さんに頼んでおいたから大丈夫だよ。平井の歴史に詳しい人だから色々教えてくださるよ」

かんちゃんとなみちゃんはその日はおじいちゃんおばあちゃんに東京での暮らしや、学校友だちのことを

お話しして、翌日おじいちゃんの車で杉崎さんの待つ平井の公民館へ行った。

「やあ、今日はお世話になるね。幹太と菜実を宜しく頼むよ」

「こんにちは、宜しく願います」

二人は頭を下げて挨拶をした。

「こんにちは、かんちゃんとなみちゃんに会えて嬉しいよ。」

平井のことを勉強したいと聞いてとても楽しみに待っていたんだ。平井のことを知ってもらえるのが嬉しいよ」

杉崎さんはにこにこ喜んで迎えてくれた。

「君が平井に住んでいても心強いよ。」

かんちゃんなみちゃん又ここへ迎えに来るからね」

と言っておじいちゃんは桑原へ帰って行った。

杉崎さんは立派な平井の公民館の中へ二人を案内してくれた。

玄関も廊下も広々としている。台所も広くゆったりとしているのが見えた。

広々とした廊下の右側に広い二間続きの和室。

左側は広い廊下をはさんで応接セットが幾つも並んでいた。

奥の方にはまだ幾つかの部屋が見えた。

応接間の机の上に絵図を広げて杉崎さんは平井の地理を説明してくれた。

「昔の人が歩いた街道からお話するね。」

平井の場所は三島大社の鳥居前から大場郵便局前までは下田街道と同じで、そこから下田街道と分かれて東に進み伊豆箱根鉄道大場駅の踏切りを渡り、八ツ溝、大土肥、平井を経て軽井沢地内へ入る街道が熱海街道といわれ、根府川通りはほぼこの熱海街道と重なっているんだよ」

平井宿は根府川通りの中でも重要な村落だった。天明五年（一七八五）には家数一二三軒（内八三軒農家、九軒寺院堂）人は四八三人、馬は十八匹。馬の数が多いのはここが三島宿や軽井沢宿までの人馬や荷物の中継所になっていたからだだった。

従って宿屋もあり「宿通り」と呼ばれる通りには「富士見屋」「松屋」など数軒の旅籠屋があった。

高札は絵図を見ると村の中央部分根府川通りが大きく右折する角にあり、上沢村からの村道と柏谷村へ抜ける村道が交差する地点にあった。高札所とは幕府から出された命令などが貼り出される所で今の公示板にあたる。

近くの札場では強力や駕籠かきなどが朝早くから札をもらい客の順番待ちをしていた。主に農家の人の仕事の合間の小遣錢稼ぎにやっていたようで、札場で整理券を発行して順番を決めていた。

「ずい分大勢の人が通った道ですね」とかんちゃんは当時の平井の賑わいが目に浮かんだ。

「有名な人が通った記録も残っているよ。」

明治新政府の右大臣だった「岩倉具視」俳人「正岡子規」連歌師「宗長」文人であり画家の「司馬江漢」イギリスの初代公使「オールコック」などで、この人は外国人で最初の富士登山をした人でこの時、韮山代官所は軽井沢村と平井村での継ぎ立てのため、人馬を差し出すように近在の十九の村々に文書を出しているんだ

よ」

「十九の村々の人たちは大変でしたね」

かんちゃんはオールコックについて興味を持ち終日函南図書館で調べてみた。

明治の初めの頃日本は二六〇年間あまり続いた江戸幕府による政治と鎖国政策に終止符を打つ事になった。

オールコックは日本との外交交渉の代表としてやってきたのだった。

そして江戸の町から遠くあなたに見える富士山にすっかり魅せられた。

「ああ！　なんて美しい山なんだろう。あの富士山に登ってみたい！」

富士山への想いが日毎にふくらみ、オールコックはついに幕府へ申し出た。

「お願いします。どうか富士山へ登らせてください」

閣老たちは

「国内がもっと平穏になるまで国内旅行は勿論のこと富士登山も禁止である」

と中々首を縦にふらなかつた。それでもオールコックはあきらめないうで繰り返しお願いしたのであった。

その強い態度にさすがの閣老たちも許可せざるを得なかつた。

こうして陸上に行く最初の内地旅行を江戸から東海道を歩き富士登山。そして熱海訪問という計画を立て実施したのである。

一八六〇年九月四日、一行八名の日本側一〇〇名余りその内訳は、護衛の役人や目付通訳、荷役、イギリ

ス公使館員、植物学者、科学觀察要員、馬三十頭。以上の大行列は神奈川県伊ギリス領事館を出発したのだった。

この旅路の目的は首都から離れた地方の一般民衆の農耕生産生活状態、支配層との関係などの社会状況を觀察するためだった。

オールコックだけが駕籠に乗りゆつくりと東海道を西へ下って行った。

富士宮の浅間神社に寄り村山登山道から山頂をめざした。

宿坊では桶に布団を敷いて即席の椅子、特別のお風呂、蚊帳の用意など心のこもったもてなしを受けたとオールコックは「富士山登山と熱海の硫黄温泉の訪問」にさし絵と共に詳しく書かれているが熱海には二週間滞在した。

その時英国から連れてきた「愛犬トビー」が大湯間欠泉の熱水を浴び火傷で死んでしまった。その時熱海の人々は異国で死んだ犬を哀れに思い墓を掘り丁寧に弔った。

オールコックはとても感謝して「日本人はまことに親切な国民」と著書に記し日英親善の礎が築かれた。

「かわいそうなトビー」と英語で刻まれた墓が今でも大湯間欠泉の一角にある。

かんちゃんなみちゃんはこの「愛犬トビー」のお話を知り、国同志の親善を深めるためにはまず個々の人間の温かな思いやりの心が大切ではないかと、そしていつか「愛犬トビー」のお墓参りもしたいと思った。

「さあこれから平井の史跡めぐりに行こうね。まず天地神社にお参りをしよう。絵図では「天地明神」となっているが明治六年九月に「天地神社」と改称されたんだよ」

三人は手を合わせ祈った。この天地神社にはその昔今の倍以上の木々が生い繁り、多くの巨木のお陰でどんな暑い夏でもひんやりとした空気が漂っていて、その下で平井特産のスイカの市が立ったそうだ。

まだ直径一メートル位の大木があちこちに立っていて巨木名木の学習の場でもある。

杉崎さんは大クスノキを指して言った。

「この大クスノキは樹齢八〇〇年、函南一の巨木で天地神社の御神木だよ。クスノキは樟脳と言って根や葉などを蒸留して防虫剤に使われるため、木全体に芳香がして葉を切ると匂いがするよ。

小父さんが子供の頃、近所の子供たちはこの神社に集まって、誰が一番高くまでこの木に駆け登ることができるか競走したもんだよ」

「えっ！　こんな大きな木に駆け登ったの？」

なみちゃんはびっくりして言った。

「いやいや、この木が今より小さくて少し傾っていて登りやすかったんだよ」

今では木の根の保存のため周囲を鎖で囲み大切に保存されている。

「昔、区の運動会もここでやったんだよ。みんなここで遊ぶのが楽しみだね。野球もよくしたもんだよ。

野球道具は全て自分たちで作ったんだ」

「手作りの道具で野球をするなんてすごいしここは区民の憩いの場でもあるんですね」

かんちゃんは感心して言った。

「このクスノキは昔も今も子どもたちのことを見守っていてくれるのね」

ブランコやすべり台が整備されている境内と大クスノキを見上げてなみちゃんは言った。

天地神社を後にして杉崎さんの車は熱海方面に向かった。

根府川通りと函南駅へ行く道との三差路、信号の所から少し行くと道路は大きく曲がって上り坂になる。

その曲がり角のあたり右手に「薬師堂」「阿弥陀堂」があった所は、今は住宅地となり「堂の前」という名称が残っている。

ここに十二薬師を祀ったお堂があり明治六年に廃寺となって、十二薬師様は養徳寺に移された。そして明治十二年お堂は焼失してしまった。この薬師堂は一三九八年の古い書物に書かれているので相当古くから続いていたものだそうである。

隣にあった阿弥陀堂も明治六年に廃堂となり阿弥陀様は養徳寺に移されたそうだ。

そこから少し先の左手杉崎家の石垣の上に三体の石仏が安置されている。

「この石仏は道祖神でかつてはこの少し先に大竹に通じる道路があつて、その入口に置かれていたのをここに移し大事に保護されているんだよ」

「ずい分昔に作られたみたいね」

となみちゃんはコケむした道祖神を見て言った。

「本当！ でも刻まれた字は読めるよ」

三体の道祖神のうち一番左側のには

「右あたみ 左ふなやま」の文字が刻まれているね。「ふなやま」は桑原にあつて「高源寺」という由緒あるお寺があるから、ここからお参りに行く人たちがいたんだね」

「高源寺には二年前の夏休みにおじいちゃんに連れて行ってもらいました」

「車で行ったけれど遠かったわ。ここから歩いて行ったなんて大変だったでしょうね」
「そうだね。次は平井の地名となったと言われている井戸の所へ行ってみよう」

三人は車から降りて坂道をくだり空き地にある井戸をめざした。

左隅に錆た鉄の柵に囲まれた四角い井戸がポツンとあった。何も書かれていない。
すぐ上の家に住む御主人に聞いてみると

「この井戸は昔からここにあるけれど、平井の地名になった井戸かどうかはわからない。
今は使われていないよ」

ここには「井戸窪」という屋号の家があったそうだ。

平井の地名については「薬王寺」の古くから伝わる書物に、平井には昔から井戸がなくてただ一つ、薬王寺の側にだけ井戸があつて泉が湧き出て平かなり。一村これに頼る故に名が付いた。と記されている。

薬王寺は養徳寺開創以前のお寺だった。又もう一説には「薬王寺の前に平らな大きな石が置いてあったので「平石」の「し」をとって「ひらい」としたものだ」と伝えられている。

遠く数千年昔の縄文や弥生時代の人たちもかなり水では苦勞されただろう。

平井の女の人たちが野良仕事から帰ってきてまず最初にやらなければならないことは、薬師さんの井戸か不動の滝まで水を汲みに行くことだった。

平井に嫁をやると水くみが大変だから止めた方がよいと、水不足の時の歌が残っている。

嫁に来るなら平井はおよし

いやだ平井は滝の水

いくら平井に水ないとても

嫁に夜水は汲ましゃせぬ

「水汲みはとても辛いお仕事だもの」となみちゃんはため息をついた。

「水は薬師井戸や不動の滝の滝水を使用したり、その他広い地域では自宅に深さ十メートルから二十メートルの井戸を掘っていた人もいたんだよ。

ところが大正中期より丹那トンネル工事や大正十二年の関東大震災のためか、水が徐々に減りはじめついは日常の使用にも事欠くようになってしまったんだ。

けれど不動の滝水は枯れることがなかったので、夕方になると水汲みの長い行列が続いたそうさ」

「平井の皆さんは水に大変苦労されたのですね。その苦労からいつ頃抜け出すことができたのですか？」

「昭和三年頃平井出身の三島市菱屋旅館室伏清五郎が、飲料水困難打開のための丹那鑿道湧水を誘水し使用することを熱心に主唱し、同志杉崎芳太郎と区に建議し、区長岩崎作蔵もこれを認め区議にはかり水道施設の大事業に取りかかることになったんだ。

水道組合を設立し区の行政機関の下に区民協力して工事を遂行したんだよ」

完成後水道の蛇口からほとぼしり出る水に平井区の皆さんの喜びは大変なもので、落成式には仮装行列も行われて全区民で完成を祝った。

記念碑が天地神社参道入口に建てられている。

「長い間の水の苦勞がなくなり本当に良かったですね」

「水汲みが大変だったお母さんたちのこと忘れてはいけないと思う」となみちゃんはしんみりした口調で言った。

そこから養徳寺へ行った。

「養徳寺は今から六三〇年前、足利三代義満の時に創建された御本尊は「十一面觀世音菩薩」「薬師如来」だよ。廢堂となった阿弥陀堂の「阿弥陀仏」薬師堂の「十二薬師」もここに祀られているよ」

お寺の人に挨拶して本堂に上がらせて頂いた。

本堂正面に「十六羅漢図」右側に「因果応報図」が掲げられてあった。

「仏様たちや額の「十六羅漢図」や「因果応報図」は歴史を感じさせられますね」

「あっ！ だるまさんの大きな画もあるわ」

「昭和の初め頃まではこの門前で縁日が開かれてずい分賑わったそうだよ」

門前には「庚申供養塔」「地藏菩薩像」が立ち並んでいた。

そこから住宅地内の狭い道を抜けると広場があり、駐車場に車を止めて草木が生い茂る左隅みの細い道を入って行くとそこが不動の滝であった。

せせらぎの音が聞こえ滝の水が樋を伝って流れ落ちていた。

「昔はもつとたくさん水が流れていたのだが」

と言いながら階段を上って行く杉崎さんについて行くと、大きな岩々に囲まれた洞穴の中に水が湧き出ていてそこから竹の樋で引いているのだった。

「子どもの頃夏はよくここで遊んだなあ」と懐かしそうに辺りを眺めながら杉崎さんは、隣にある不動堂の入口の鍵を開けた。

この不動堂は不動明王を祭神としてお祀りしていて明治時代になって「淡島神社」と改めそれから大切に守られている。

「平井の御先祖様の中にも修験者として滝に打たれて修行した人がおられるよ。

以前は一月不動さん、不動尊の縁日は二八日であるが二七不動さんといって集まった。

五月不動さん、二七日信心深い老人たちがこの大滝のお堂に集まってお経を上げた。

十月不動講の時には成田貯金、大山貯金などを集め年三回の祭典があったんだ。

普段でも年配の女性の皆さんはよくここに集まって、お経を上げたり世間話をして過ごしていたんだよ。

今では祭典も年一回となって平井区の一組から十組が順番で催しこのお堂を守っているんだ」

再び天地神社の公民館に戻り、今度は竹の会の会長さんに平井の行事についてお話を伺った。

「電話でお話したかんちゃんなみちゃんに、竹の会の活動について説明お願いするよ」

二人は竹の会の会長さんに挨拶をした。

「こんにちは。遠くからよく来てくれたね。竹の会は今年で五年目を迎えるんだ。

夏にはこの境内で盆踊り大会が開かれるのだが、竹の会では竹の樋を作って流しそうめんをやっているよ。

ミニトマトなんかも流してね」

「とても楽しそうね」となみちゃんは言った。

「小正月の一月十四日に行われるどんどん焼きは、昔は不動の滝のそばの広場でやっていたよ。子どもたちだけでね。

今は下の田んぼで開かれていて竹の会もお手伝いをしているよ」

お飾りや習字が上手くなるようにと書初めを燃やし、竹の竿の先につけたおだんごを焼いて病気にならぬよう祈って食べるんだ」

「どんどん焼きのこと、桑原のおばちゃんから聞いたことがあります」

「焼きたてのおだんご美味しそう。私もやってみたい」

都会育ちでどんどん焼きの経験のないかんちゃんとなみちゃんは少し羨ましそうでした。

「竹の会ではお祭りや新年を迎える前に鳥居などのしめなわつくりもするよ。

門松は幾つも作って公民館や町の主な建物の入口に飾ってもらうんだ」

「行事に使われる沢山の竹はどうされているのですか？」

「山に竹が増えすぎてね。使って欲しいという人からもらってくるんだよ」

「平井の竹の会は地区の皆さんと協力し合って皆さん居喜ばれることをされているんですね」

「伝統が次の世代に引き継がれていくように。又、行事を通して区のみなさんの絆が深まるように考えているんだ。

一番力を入れているのが竹灯籠で鳥居から拝殿まで並べた八〇〇基は、どの灯籠にも大みそかの九時から元旦の一時までの間灯りを点すんだよ。毎年テーマを決めてね。

富士山が世界遺産に選ばれた年には富士山を。去年はスカイウォークだったよ」

「すごいなあ！ 子どもたちも参加していますか？」

「勿論。灯籠の竹の表面を削った所に新年の希望や目標を自分で書いて飾るんだよ。

その数は七十基から八十基になるね」

「子どもたちが大勢集まる行事っていいですね。なみちゃん、竹灯籠が点された中を歩いてみたいね」

「本当！ 歩いてみたい。次の日はお正月だし楽しみたいね」

二人は大みそかの夜の幻想的な竹灯籠を想い浮かべて言いました。

「これだけ活動するには費用がかなり必要ではありませんか？」

「補助金だけでは足りないので区有地の下草刈り、アルミ缶の収集、お正月のお飾りの注文取りや野菜を売ったりして産み出しているよ。行事や作業の時区民の皆さんに呼びかけると協力してくれるから助かるんだ」

「平井を良くしていかうとする区民の皆さんの気持の表れですね」

「今、平井は「竹の会」や「しゃぎりの会」を中心に区民協力して素晴らしい地区活動をしているが、昭和四十四年には明治一〇〇年を記念して「長寿会」が「平井誌」を出版したんだよ。これに平井のあらゆる歴史がまとめられてあるから参考にするといいよ。小父さんのを貸してあげるね」

杉崎さんが貸してくださった「平井誌」はずっしりと重かった。

その重みは、平井の歴史そして文化資料として次世代へ残すために作られた区民の皆さんの、熱意と真心がこめられているからと坎ちゃん思った。

「平井誌」は明治一〇〇年を記念して平井長寿会の発意により全区民の心からなる支援と、監修に当たられた鈴木勝彦、斎藤宏、杉崎建男の三先生の有効適切な助言指導。古文書など幾多の貴重な資料を提供された方。更に執筆の任にあたられた三十有余の方々が筆をとり、精根こめて書綴られた努力の結晶である。と当時の平井長寿会斎藤与一会長は「発刊のことば」で述べている。

当時の竹山静岡県知事、田中函南町長、渡辺県老人クラブ連合会会長、軽部日本教授・文学博士・芹沢平井区長たちが明治一〇〇年を記念して最もふさわしい事業、その着想と努力に深い敬意を表し、その成果に對して大いに賞賛の念を禁じ得ないと序文や平井誌によせてに書かれている。

大切な「平井誌」を胸に抱いて坎ちゃんは、杉崎さん、竹の会会長さんに心から御礼の挨拶をした。
なみちゃんも深々と頭を下げた。

外に出て平井の今と昔を知り学んだ満ち足りた気持ちで大クスノキを見上げると、まるで別れを惜しむかのように枝葉がサワサワと揺れていた。

参考文献

『平井誌』平井長寿会／〔編〕平井長寿会 一九六九年

『函南町誌 上巻』函南町誌編集委員会／編集 函南町 一九七四年

『函南町誌 中巻』函南町誌編集委員会／編集 函南町 一九八四年

『函南町誌 下巻』函南町誌編集委員会／編集 函南町 一九八五年

「文化財愛護の会資料」

『富士登山と熱海の硫黄温泉訪問』ラザフォード・オールコック／著 露蘭堂 二〇一〇年

取材させて頂いた方々

杉崎建男様（資料提供）

梶尾規一様（資料提供）

鈴木 進様

富永和彦様

他多数

「かんちゃんなみちゃん」シリーズの 1 作目・2 作目は以下の二次元コードから読むことができます。

1 作目



2 作目



かんちゃんなみちゃん ^{ひらい} ^{いま} ^{むかし} ^{たず} 平井の今と昔を訪ねて

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ^{すずき} ^{かつこ} 鈴木 克子

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

かんちゃんなみちゃん兄
妹はおじいちゃんの親友の
案内で平井の史跡をめぐり
歴史を学ぶ。竹の会会長よ
り行事についての説明も受
けた。長年の水不足を水道
事業を立ち上げ完成。「平
井誌」の発行など区民の前
向きな姿に感動する。

